エイリアンハンター
ミア
斐芝嘉和
表紙イラスト：麻野まや
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『エイリアンハンターシア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

エイリアンハンター ミア

斐芝嘉和
表紙／麻野まや

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

佐山（さやま）・スナイプ・シア

子宮に寄生した異星人の力により、常人離れした能力を発揮する。
愛する得物は超高密度物質の木刀。

河野佳子（かわのよしこ）

女学園の生徒。ふとしたきっかけからシアの戦いに巻き込まれてしまう。

「い、いや……やめて、ください……！」

汗の匂いが染みついた体操マットの上で、まだあどけない面立ちの少女が掠れた声で呻く。真夜中の体育倉庫、小さな窓から挿し込む銀色の月明かりを浴びて、あどけない胸を包んだブラウスや襟元を締めるスミレの花のようなリボンが青白く光る。涙に曇る丸眼鏡、羞恥に火照る幼い頬、マットに投げ出された三つ編みの黒髪――バンザイの格好に引き延ばされた両腕は硝子細工のように繊細で、乱れたスカートからこぼれ出し懸命にくねる脚も水仙の茎のように瑞々しく細い。

「誘ったらフラフラついてきておいて、いまさらソレはないんじゃない？」

「ち、違います！　センパイが大事な話があるっていうから……私、私……」

「バカねえ。こんな夜中に大事な話っていったら、普通はこういうことなのよ」

生まれたての妖精にも似た佳弱い少女を抑えつけているのは、やや歳上の、同じ制服を纏った少女たちだ。腕を抑えつける者がひとり、細い脚を左右に広げてハの字に引き延ばしているふたり、身体の両脇にひとりずつ、震える膝の間に身を入れて啜り泣く獲物を見下ろす少女がひとり。

「し、知らなかったんです！　放してください、帰らせてください！」

全寮制の女学園だから同性同士のカップルというのは珍しくないが、泣きじゃくる少女――河野佳子にその気はない。ましてこんな、強姦紛いの行為など。

ちょっち試読 BAN!S

「放して、放して……放してぇっ！」
「よいお声ね、河野さん。ゾクゾクしちゃう」
薄闇にヌメヌメと輝く紅い唇が、吐息のような囁きをこぼしていやらしく歪んだ。陰になった顔の中、双眸が妖しい光を湛えて爛々と燃える。ただの悪戯や度の過ぎた悪巫山戯ではない。「犯す」という意思を露わに、佳子の震える身体に手を伸ばす。
「あ……あぁっ⁉」
内を向いて震える膝小僧に、ぬちゃ、と冷たいぬめりが触れた。月明かりの中青白く輝く、上級生の手だ。
しかし、これは？
濡れた腹を波打たせて這い回る、五匹のナメクジのような感触は……⁉
「な、なにを……ひッ⁉」
控えめに盛り上がったブラウスの胸越しに股間へ目をやった佳子は、思わず息を詰まらせた。膝の間に入り込んだ上級生の手指が、炙られたロウ細工のように蕩けていたのだ。
「なにって、気持ちいいコトよ。河野さんは可愛いから、私たちの仲間にしてあげる」
トロリ、トロリと伸びた指は佳子の膝に絡みつき、絡み合ったミミズのようにのたうちながら、瑞々しい太股を舐めてスカートの下へ潜り込んできた。
「ひ……あンッ⁉」

軽く触れられた内股に微弱電流が走り、恐怖に引き攣った喉から甘い声が溢れ出る。
（いまのは……なに⁉　どうして、こんな……⁉）
いやらしい蛇のようにくねるモノは柔肌に冷たいぬめりを擦り込みつつ、震える太股を伝って股間にゆっくり迫ってくる。怯えて悲鳴をあげるべきだ、必死に身を捩って泣き叫ばなければ――頭では分かっているのに、
「や、うぅン……あぅ、ンぅうっ⁉」
唇からこぼれ出すのは恥ずかしい吐息。柔肌の裏に走る琴線を爪弾かれているようだ。幼気な肢体に悦びの旋律が鳴り響き、腰が跳ね上がって踊ってしまう。
「ほうら、気持ちいいでしょう？」
「き、気持ちよくなんて……あっ⁉」
逆さに顔を覗き込まれた佳子は、上級生の口からデロリと垂れだした紅いモノに気づいて短い悲鳴を上げた。
たぶん、舌だ。
蜂に刺されたように大きく膨れ、蛸の脚のように無数の吸盤を生やし、蛇のように長く伸びてウネウネくねってはいるが。
「どう？　素敵でしょう。私たちはみんな、こうなってるの」
まさか、そんな――絶句した佳子に見せつけるように、周りの少女たちが口を開き、お

ぞましく変形した舌を伸ばした。口の中はいったいどうなっているのか、モップの毛のような無数の触手が唇を押し退けてはみ出し、声に合わせてゾワゾワと蠢く。

自分の目が信じられない。こんなこと、あるわけがない――理性が軋み、ひび割れそうになった。抑えつけられた身体が緊張し、喘ぐ喉がカラカラに乾き――。

（あ……や、やだっ!?）

股間にじゅわっと、温かく恥ずかしい感触が広がった。言葉を失うほどの恐怖に、失禁してしまったのだ。

「私たちのコレで、アナタのアソコを順番に掻き回してあげる」

「やみつきになるわよ。人間の牡なんて比べモノにならないんだから」

ぬめる触手を摺り合わせてクスクス笑った上級生が、ミミズのようにのたうつ指で佳子のスカートを掴み、捲り上げた。ああ、と声にならない悲鳴をあげ、耳の先まで赤らめて首を竦める佳子。

桜色に輝く太股に沿って視線を上げた少女が、異変に気づいて眉を顰めた。

「まあ！　河野さんったら、お漏らししてるわ！」

愉しそうな声に反応した上級生たちが、身を乗り出して佳子の股間を覗き込む。

（見ないで……見ないでぇッ！）

ギュッと目を瞑って震えるのに小水は止まらず、ふっくら盛り上がった股布に灰色の染

みが広がっていく。温かなぬめりは柔肉と薄布を伝って尻房まで流れ、スカートまでぐっちょり濡れてしまった。薄闇に充満するほのかな香り。濡れた下着は肉畝にぴったり貼りつき、白い肌の瑞々しさや口を閉じた幼い肉唇の恥ずかしそうな様子が透けて見える。

「アナタ、いくつなの？　恥ずかしいわね！」

「まだ赤ちゃんなのよ。ほら、ごらんなさいな」

白くうねる指先が、下着の縁にかけられた。慌てた佳子が声を上げる前に――ぷるん！股布が横にずらされ、温かな液体に濡れ光るあどけない肉畝が飛び出してくる。

「あらあら、可愛いオマ〇コだこと。ツルンツルンじゃない」

月明かりを浴びて青白く輝く秘部は、見るからに幼かった。柔らかく盛り上がった畝は周囲の肌と変わらず、マシュマロのようにプニプニとしていて、緩やかに起伏する下腹部にも翳りの痕跡すら見えない。

「中はどうなっているのかしら？」

クスクス笑った少女の指が、小水に濡れた割れ目に触れた。

（い、イヤ、イヤイヤ……こんなの、イヤ……）

蠢く指先に大切な場所が掻き分けられ、まだ紅いヒレでしかない幼気な肉ビラが冷たい空気に舐められた。お漏らししたばかりの尿孔に好奇の視線が突き刺さる。緊張しているせいで硬くなったクリトリスが、莢（さや）の中でズクンズクンと疼く。

ただ陵辱されるだけでもおかしくなるくらいおぞましいのに、こんな、こんな——声にならない悲鳴が頭の中に渦を巻き、意識が遠退きかけた。
「どうしちゃったの、河野さん？」
「ほら、泣き叫んでくれないと面白くないわよ」
ゴムのように伸びた手指がブラウスの胸にかかり、前身頃の隙間から服の下へ潜り込んできた。ブラのカップが押し退けられ、膨らみ始めたばかりの青い乳房の上を冷たいミミズが這い回る。
秘部に潜り込んだ指先は先を窪め、小さな吸盤を作った。あどけない粘膜花弁に吸いつき、プチュ、プチュ、と小さなキスを繰り返す。
「ふぅ⁉　は、うぅンっ⁉」
乳房と股間に電気が弾け、体操マットに抑えつけられた身体が跳ね踊った。おぞましいのに、イヤなのに、身体は激しく反応してしまう。
「なんだ、ちゃんと感じるじゃない。これなら種をつけてもいいわね」
「赤ちゃんが赤ちゃんを産むの？　うふふ、面白そうね」
「ひ……ンぉぷっ⁉」
ようやく漏れそうになった悲鳴が、太くて長い舌に塞がれた。反射的に立てた歯が、プリプリした弾力に押し返される。冷水を詰めたゴムボールのような感触だ。しかもソレが、

無数に生えた吸盤で口の中に吸いついてくる。
「ぇぇ、むォ、うぅ……！」
頬の内側や舌、上顎の粘膜に、プチュプチュと降り注ぐ小さなキス。おぞましい舌はさらに伸び、喉の入り口をせせるように舐められた。
（や、やだっ！　気持ち、悪い……！）
引き延ばされた手足を狂ったようにくねらせ、眼鏡がずれるほど激しく藻掻く佳子を、
「うふふ、ピクピクしてる。可愛いわね」
膝の間に蹲り股間に顔を寄せていた少女が笑う。口から伸びた触手状の舌が小水に濡れた秘部に近づき、震えるビラビラをぴちょり、ぴちょり。
「ぷぁ⁉　ンぁ、んむぅッ！」
恥ずかしい場所に心地よい感覚が閃き、恐怖に蒼褪めていた幼い頬が羞恥と悦びに淡く染まった。眼鏡の下で揺れる瞳が熱を帯び、震える睫が涙に濡れる。
（ど、どうして⁉　どうして、こんな、ことが……）
不気味な少女たちに大切な場所を犯されようとしているのに、なぜか、拒む気持ちが弱い。ミミズのようにくねる細指に揉み立てられた乳房には甘い感覚が蓄積し、乳首に冷たくて細いモノが巻きついてくると快感が弾ける。
「う、ンぁッ⁉　ン、む、おぅぅぅ……ッ⁉」

首を巡らせて振り返った瞳は、宝石のように碧い。
硬質の光を放つ切れ長の瞳、スッと通った形よい鼻筋、真一文字にきつく引き結ばれた桜色の唇――人形のように整った顔立ちなのにヒトを寄せつけない気配を放つ細身の少女は、スミレ色のリボンが揺れるブラウスの胸に手を当て、
「一年A組、佐山シアだ」
冷ややかに名乗った。

翌日、朝早く――聖隷女学園の学生寮には外出禁止令が出された。構内で凶悪事件が発生した、犯人はまだ近くにいるかもしれない、危険だから出歩かぬように、というのだ。凶悪事件というのは昨晩体育倉庫で起きた惨劇のことだろう。人里離れた山中に建つ全寮制の女子校だから、大事件が頻発するようなことはない。
（どうしよう、どうしよう……）
焦る佳子の目の前で、シアは平然としていた。自分の部屋から持ってきた本格的なティサーバーで香りのよい紅茶を淹れ、窓辺の椅子に腰掛けて、細指で抓んだ白磁のカップに桜色の唇をつけて。
白いブラウスにスミレ色のリボン、チェック柄のスカート――着ている制服は佳子と同じなのに、纏っている雰囲気はまったくの別物だった。夏の陽射しを束ねたような金髪の

ツインテールや、深い森の奥の湖水のように澄みきった碧い瞳、月光にも似た白く瑞々しい柔肌を差し引いても、まるで違う。なんというかこう――お嬢様なのだ。

椅子に浅く腰掛けてピンと背筋を立てた姿は、妖精のように華奢なのに犯しがたい気配を放っていた。よくできたビスクドールのよう――いや、水晶の刃のよう。内戦で危険になった国からの帰国子女、学園創立以来の秀才、男装が似合いそうな生徒ナンバー1……ついて回る肩書きも様々で、どこにでもいる少女にすぎない佳子はどうしても、

「あ、あの……これから、どうするんですか？」

言葉遣いが卑屈になってしまう。

「どうもこうもない。なるようになるだけだ」

碧眼をチラリとあげたシアの口調は、男性のようにぶっきらぼうだった。怒っているのかしら、と蒼くなった佳子だが、勇気を振り絞り、訊かなければいけないことを訊く。

「昨日のアレ……なんだったのですか？」

「？」

「あ、あの、だから……どうしてセンパイたちに、あ、あ、あんな、ことを……」

殺す、という禍々しい言葉をどうしても口にできず、不器用に口ごもる佳子。それから慌ててシアの顔色を窺い、つけ足す。

「も、もちろん、助けてくださったことには感謝しています！　でも、アレは……あんな

ことまで、しなくても……」

こんなに綺麗なのに、怖い。どうして一緒にいるのか話してくれないのも、怖い。

ただ、怖い怖いと怯えているだけではダメだと、真面目な佳子は思う。ヒトを外見で判断してはいけないという建前を真に受けているのだ。シアのことを理解し、なにを考えていたか分かれば、正当な理由で彼女のことを判断することができるはず――。

「普通の人間でないことは見て分かっただろう？　それだけではダメか？」

シアは美しい眉をわずかに顰め、面倒そうに言ったが、佳子は引き退がらなかった。眼鏡の下で幼い頬をやや強張らせ、知らず知らずスカートを握り締めて身を乗り出す。

しばらく睨み合う形になり、先にシアが折れた。黒髪を三つ編みにした丸眼鏡の少女のあどけない頬に、健気な頑固さを感じたのだろう。紅茶の香りがする色の淡い唇を苦笑の形に歪め、言葉を選びながら話し始める。

「連中はプロキアンのキャリアだ。しかもインキュベーターだった。きちんとした設備と医者が揃っていれば切除手術も可能だろうが、こんな辺境の地では無理だ」

「ぷ……ぷろき、あん？　きゃりあ？　いんきゅ……」

「インキュベーター。孵卵器だな。卵を孵すモノ」

静かにカップを下ろしたシアが言葉を切り、姿勢を正した。

（う……わぁ……）

真正面から見つめられた佳子は、思わず息を呑む。月明かりの下で見たときも思ったが、こうして間近で見ると呆れるほど美しい。スッキリとした頬は指で触れて確かめたくなるほど柔らかそうで、唇は桜の花びらのようだ。硬質の光を放つ瞳はどこまでも深く清く透き通っていて――。

ポォッとしている佳子に気づいていないのか、シアは真剣な口調で続けた。

「この地球上にはすでに、たくさんの宇宙人が潜伏している。人間や獣に似ている者は変装し、形が異なるモノは深い森の奥や海の底、あるいは夜の闇に隠れて――その中には、昨日の連中のように人間に寄生している者もいる」

「寄生……あ、キャリア！」

「そう。寄生型宇宙人に寄生された者をキャリアと呼ぶ。宇宙人の卵を宿し、孵化させる者は、インキュベーター。私はそういう連中を狩っているのだ」

俄には信じられない話だ。しかしあの、おぞましく変形した舌や、センパイの秘部から生え出してきたアレは――納得しかけ、フッと次の疑問に思い当たる。

「で、でも……その宇宙人は、どうしてセンパイたちに？」

「人間は、現在の地球上でもっとも支配的な種族だ。化石燃料を利用して機械文明を構築し、惑星上という制約内であればほぼどこへでも移動できる。寄生型宇宙人が一定量のキャリアやインキュベーターを確保するのに、これほど適した種族は他にない」

えられてしまったのだ。

喉に閃く淫悦に、碧い瞳が戸惑って揺れた。眉根が開き、頬が弛んで、淫棒をねじ込まれた口から甘い吐息とともにねっとりした涎が溢れ出してくる。

「うむ。排泄粘膜もナカナカいいぞ。滑らかで瑞々しくて、よく動く」

美少女の震える尻を掴んだ大男が唇を歪め、ゆっくりと腰を進めた。

「ぷぁっ!? ぇあ……あぁあっ!」

小さな粒を浮かせた亀頭に直腸粘膜がしごかれ、腹の奥が熱くなる。火の粉を散らして踊る炎が、激しく踊っているような――ひとつ、またひとつと潜り込んでくる淫茎の肉イボに肛膜が弾かれ、尻の真ん中に鮮烈な感覚が炸裂した。うしろ手に縛られた身体が電流拷問を受けているようにビクン! ビクン! と痙攣して、驚きに見開かれた碧い瞳が熱っぽく潤み始める。

「どれ、少し悦ばせてやるか」

ゆっくりと根本までねじ込んだ大男が、今度はゆっくりと腰を引き始めた。

「ぇあっ!? ぇあ、え……あぁっ!」

抜け出ていく肉イボに菊膜が捲り返され、白い美尻の真ん中に紅い肉華が咲く。ヌポポポ、ヌポポと音を立てる尻孔に肛悦が弾け、肉棒に塞がれた喉の奥から媚を含んだ鳴き声が迫り上がってくる。

えっちシーン試し読み ここから スタート!

「あ……ンぇあ⁉　ンぇああっ‼」

秘裂にグリッと、硬いモノが押しつけられた。シアの太股の間で鎌首をもたげた、もう一本の肉棒だ。感じやすいビラビラが圧し潰され、掻き分けられる。硬く小さな粒々に、粘膜花弁がしごかれて処女穴がこじ開けられる。

「こっちの穴のほうが感じるのだろう？　遠慮するな。好きなだけ鳴け」

「あぇ、あぇえ……ッ！」

ダメ、やめて――プライドをかなぐり捨てて叫んだのに、淫棒は容赦なくねじ込まれてきた。普通のペニスすら知らない繊細な粘膜が、冷たい亀頭にムリムリこじ開けられる。

（さ、裂ける！　裂けてしま、うぅっ！）

尻孔のときと同じような激痛を予感し、蒼褪めるシア。だが、太股のつけ根に湧き上がったのは痛みではなく、生まれて初めて体験する鮮烈な快感だった。

「ふは……⁉　ンぷぁ、ン、うぅ……⁉」

ヌチュ、ニュル、と、膣穴に埋もれた亀頭の鼻先が滑る。小さな肉芽のひとつひとつが先走り汁を滲ませ、シアの粘膜に擦り込んでいるのだ。浸透する催淫成分に快楽神経が掻き立てられ、肉が裂ける痛みすら悦びにすり替えられる。

（ああ、そんな……そんな、そんなぁ――ッ！）

羞じらうシアの中に、冷たい肉塊がゆっくりと潜り込んできた。痛くなくても、イヤだ。

大切な処女をこんな連中に散らされるなんて、絶対にイヤだ――。
「また怖いことを考えているの？　懲りない子ね」
苦笑した鈴音がシアの頭を抑え、腰をゆっくり回した。
「うぇっ⁉　え、えグ……ッ！」
喉の中で肉塊が前後し、涎を垂らす口の奥からグッポングッポングッポンとはしたない音が溢れ出してくる。しごかれた食道に淫悦が閃き、頭の中に真っ白な光が炸裂した。
「野蛮な地球人なんて獣と同じ。私たちの家畜よ。好意で遊んであげているのだから、私たちを悦ばせるためにもっともっと努力しなさい」
鈴音の声が遠い。
それどころではない。
（ああ、ああ、あああっ！　入ってくる、入って……く、るぅっ！）
甘く蕩けた壺口が冷たい塊にこじ開けられ、膣穴を熱い波紋が駆け上る。まだ浅いヒダヒダが躊躇いがちに震え、じゅわ、じゅわ、と蜜を滲ませ始めた。肉悦に呼び覚まされた牝の本能が、男を知らぬ少女の穴を女の穴に変えようとしているのだ。
「お？　なんだ、一丁前に濡れているではないか。いやらしいオマ〇コだな」
満足げに笑った大男が、シアの腰を掴んで引き上げた。角度の変わった淫棒が膣口を抉り、冷たいクサビ型がもう一段深く潜り込んで――。

「ンぁ、あ……ンぷぁっ！」

ぐちゅぷっ！

硬い亀頭が完全に潜り込み、粘膜が裂けるほど伸びきっていた壺口がくびれたカリ首を締めつける。処女膜と呼ばれるわずかな突起物が磨り潰され、炸裂する激感。

（あ……あ……ああ……！）

尻孔と秘裂に、太い肉棒をハッキリと感じる。

こじ開けられて伸びきり、甘く痺れて、少女にとって大切なモノから男を悦ばせるための淫らな穴に変わっていく。

「さあ、奥を探ろうか」

「ンぇあ……ぇあっ⁉　あ……あ、ああっ⁉」

破瓜の衝撃が醒めやらぬ少女の胎内に、太くて硬い肉棒がグリ、グリ、とねじ込まれた。鮮血を滲ませた壺口が硬い肉イボに揉み込まれ、初めて異物に触れた幼い膣襞が硬い粒々に磨り潰される。

（あ、熱いッ⁉　腹が……燃え、るぅっ⁉）

キャリアのペニスは冷たいのに、シアの膣膜は熱く痺れた。擦り込まれた催淫液に快楽神経が掻き立てられ、激しく感じてしまうのだ。

「ン、ン、ンぅぅ――ッ！」

幼い肉膜に炎が踊り、閃く火の穂に膣奥を舐められる。炙られた子宮がグツグツ煮えて、緊縛された細い身体が電流を通されているようにビクン、ビクン、と痙攣した。

「まだ動かしていないのに、大袈裟なヤツだな」

苦笑した大男が、震える少女の尻を掴んでゆっくりと腰を引いた。

（あ……ッ!?　や、やめ……あぁッ!!）

抜け出ていくイボイボに肛膜と膣口を弾かれ、双穴を隔てる繊細な肉膜が捩れた淫棒に挟まれ、揉み潰されて、鮮烈な感覚が刻み込まれる。弾かれて反り返ると口を犯した肉棒が退けて、喉の奥にまで熱いモノが炸裂した。

「あぁンッ！　素敵ぃッ！　喉にオチンチンがしゃぶられて、た、卵が、卵が……うぅ、出ちゃいそうよっ！」

悦びの声を上げた鈴音が膝立ちになり、シアの頭を固定して腰を振り始めた。硬さを増した淫棒がグポッ！　グポッ！　と細い喉を鳴らし、さらに奥へ突き進んでいく。

仲間の昂奮に居ても立ってもいられなくなったのか、手足に絡みついていた肉紐が解け、ブラウスの中へ潜り込んできた。あるかなきかの幼い胸に冷たい粘液を塗りつけ、ぷっくり膨れた乳首を目指す。太股から秘裂に迫った触手は破瓜の血が混じった愛液を舐め、肉畝の縁に色づいたクリトリスを見つけると沙蚕のような口を開け――カプッ！

「ンぁッ!?　ンぁ、アアアアッ!!」

淫核に激感が炸裂し、肉棒を加えた口から唾液混じりの悲鳴をあげて痙攣するシア。瞼の裏に眩い光が閃き、意識が飛ぶ。ヌチュ、ニチョ、と冷たい粘液を塗り込まれた乳房の先、弾けんばかりに痼り勃った乳首も、異星人の牙に甘噛みされる。

「バカ者どもめ、これは私の玩具だぞ」

理性をなくした部下たちに苦笑した大男が、悶えるシアの腰を抱え、グイッと腰を突き出した。マスターの卵が先に定着すれば、ほかの卵は着かないのだ。シアの身体を確保するため射精を優先した男は、武骨な手で柳腰を掴み、力強く律動し始めた。

「むぇあ⁉　む、ぷ……むぇ、あぁぁっ！」

催淫液を浴びて快楽の壺と化した直腸と膣が、冷たい亀頭に激しく掻き回される。しごかれた肉膜に熱い感覚が次々と弾け、突き上げられた子宮の中で淫欲の溶岩が渦を巻く。淫棒に挟まれた粘膜隔壁が蕩けるほど揉みまくられ、出入りするイボイボに弾かれた双穴の口には凄まじい電撃が次々と弾けた。

（ああ、浮く、浮いてしま、うぅぅッ！）

肉穴に刻み込まれた衝撃が悦びの高波となり、甘噛みされた肉突起に熱いモノが爆発して、意識がグイグイ押し上げられた。自由を得たシアの手は縋るモノを求め、口を犯した女教師の腰にしがみつく。

「ああン、可愛い！　この子、私にくださいな！」

幼子のような仕草に歓声をあげた鈴音が、腰の動きを強めて細い喉を激しく犯した。マスターも負けじと、美少女の尻に己の腰を打ちつける。

「お前に寄生させて私が犯すというのも面白いが、これは、私の、モノだ！」

ズン！　ズン！　ズン！

膣奥まで突き込まれた淫棒が硬さを増し、冷たい肉塊の芯に熱い感覚が膨れあがる。喉の奥でも亀頭が膨れ、乳首やクリトリスに噛みついた肉紐もなにかをこらえているようにぶるぶる震え始めた。

柔らかな頭皮や尻肌に、昂奮したキャリアたちの指が痛いほど喰い込んでくる。胎内で暴れる淫棒はギチギチと軋むほど膨れ、爆発しそうだ。怖いのに、イヤなのに、両手はさらに強く鈴音の腰にしがみついた。ズンズンと突かれるだけだった細い身体が悦びに捻れ、小さな腰がカクン、かくんと、しゃくるように動き出す。

「あはッ！　オチンチンに舌を、絡めてきたわ！」

淫悦に操られたシアの舌がうねる触手に絡みつき、イボイボの隙間を抉るように舐め回して、女教師を悦ばせた。小さな頭が前後に振れ、深々とねじ込まれた産卵管をじゅる、じゅる、と音が立つほど激しくしゃぶってしまう。

（ど、どうしてこんな……ああ、でも……動く、動いちゃ、うぅっ！）

三本の淫棒に胎内を掻き回された少女は、淫らな炎に炙られて狂おしく悶えた。ツイン

テールの金髪が汗の滴を飛ばして揺れる。唇や尻孔、膣口はさらなる悦びを求めてキュンキュン締まる。

（イイ、イイよぉっ！　おしりも、おま○こも……おくちも、イィッ！）

荒波に揉まれ、嵐に巻き上げられて、シアは遙かな高みへ登り詰めていく。しなやかな背筋がS字にくねり、白く瑞々しい柔肌が茹だったように赤らんだ。髪の生え際に真珠のような汗の珠が浮き、熱く潤んだ碧眼が焦点を失ってユラユラ揺れる。

掻き回された肉穴から粘液が溢れ、細く糸引きながら滴り落ちた。

激しく律動する男と女の間で細い身体が捩れ、駄々っ子のように跳ねて、狂ったように腰を振りまくり――。

「ンむぅっ⁉　むぅ、む、むぷぁ！　ああ、あああ、あああぁァァアああッ！　ぇぷ、ぇぷぇぷっ！　ぇぇエッぷぅぅぅう――――ッ！」

ビクンッ！　ビククンッ！

雷に打たれたように鋭く反り返った。

頭の中に万華鏡のような光の渦が爆発し、シアの意識が遙か彼方まで弾き飛ばされる。

薄い胸を反らせてヒクン、ヒクン、と痙攣する少女の肉穴が、ねじ込まれた淫棒にねっとり絡みつき、しゃぶるように蠕動した。

ビュクッ！　ビュククッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/